

2018 全日本スーパーフォーミュラ選手権 第3戦
 スポーツランド SUGO_
 2018年5月26日

予選 観客: 7,700人 天候: 晴れ

九州・オートポリスで行われた第2戦の決勝が荒天のために中止されてから二週間後、全日本スーパーフォーミュラ選手権 第3戦は、舞台を東北、宮城県仙台市郊外のスポーツランド SUGO に移した。戦わずして終えたオートポリス以降、仕切り直しのイベントとなった。中嶋一貴は、Q3まで進み7番手から。一方のジェームス・ロシターは、Q1を突破できずに後方17番手から決勝をスタートする。



- ミディアムタイヤの装着が義務づけられている Q1 において、各車 2 セットの新品タイヤでタイムアタックを行った。2 セット目のタイヤでコースインしていたセッション終盤にクラッシュがあって予選が中断。残り 2 分 20 秒で Q1 突破をかけた最終タイムアタックとなった。
- 中嶋は、12 番手のタイムをマークして Q2 へ進出。しかし、ロシターは、アタックラップで前を走行していたマシンを抜きあげてしまいタイムアップならず。Q1 敗退となってしまった。
- ソフトタイヤを装着して臨む Q2 で中嶋は、マシンセットアップをコンディションにアジャストして 7 番手タイムをマークして Q3 に進出。
- 最終セッション Q3 では、再びセットアップをコースコンディションの変化に対しアジャスト、7 番手のグリッドを得た。

Driver	Car No.	Q1	Q2	Q3
中嶋一貴	36	P12 1:05.774	P7 1:05.041	P7 1:05.498
ジェームス・ロシター	37	P17 1:06.091		

天候	晴れ/ドライ	
気温/路面温度	気温 24-24度C	路面 41-40度C

中嶋一貴 (36号車ドライバー)



「Q3 まで行けているけれど、もう少しタイムを縮められていたら、もっと良い位置からスタートできたので残念な予選でした。「良かれ」と思って Q2 から Q3 までのインターバルの間に、少しだけマシンをいじって出たのですが、良くならず、かえって悪くなってしまったので、どうしてなのか悩んでいます。フィーリングとしては、朝のフリー走行が一番良かったですね。それ以降、少しずつ悪くなって。ただ Q3 まで何とか来られているので、今一歩というところですかね」

ジェームス・ロシター (37号車ドライバー)



「金曜日のフリー走行では、それほど悪くはなかったけれど、それ以降が良くなかった。チームもエンジニアも頑張ってくれているのだけれど、何かうまく噛み合わない。そして、ミディアムタイヤのアタックラップでスローカーが前にいてコースの前半でコンマ 3 秒くらいロスしていたと思う。それが無かったら、Q2 になんとか進出できたかな。そして、ソフトタイヤのフィーリングは良かったので少なくとも真ん中くらいのグリッドからスタートできたかも。まあ、決勝は後ろの方から追い上げるしかない」

小枝 正樹 (36号車エンジニア)



「金曜日の練習走行で悪かったところを修正して予選に臨みましたが、結果として朝の練習走行の方が良かった。Q1 を突破して Q2 に向けてミディアムからソフトへセットをアジャストして Q2 へ挑みますが、良くない点があったので、Q3 に向けてセットを変更したら、より悪い方向へ行ってしまっていました、その状況でもドライバーがガンバってくれたおかげで 7 番グリッドを獲得できました」

東條 力 (37号車エンジニア)



「現状をハッキリと表す結果です。圧倒的にパフォーマンスが足りない。アタックラップで前に車両がいてタイムアップが思うようにできなかったというのは、負のファクターの上塗りとしても、ミディアムタイヤ装着でのパフォーマンスが低すぎるのが問題ですから、なんとか打開策を講じて決勝に臨みます」

館 信秀 (チーム監督)



「一貴が Q3 まで進出してくれたけれど、チーム全体としては、良くない。ジェームスが、これで三戦連続 Q1 落ちしていますからね。我がトムスとしては、二台ともに上位グリッドから決勝をスタートするような予選結果を出さなくてはならない。決勝では、何とか結果をひねり出すという傾向があるのだけれど、予選結果が良ければ、決勝で苦労しなくても良いわけですからね。一貴には、表彰台を、ジェームスには、どこまで追いつられるか期待します」

2018 全日本スーパーフォーミュラ選手権 第3戦
 スポーツランド SUGO_
 2018年5月27日

決勝 観客:16,500人 天候: 晴れ

全日本スーパーフォーミュラ選手権 第3戦の決勝は、前戦が荒天のために決勝レースが中止されたため、今回が実質の2戦目となった。グリッド7番手からスタートを切った中嶋一貴は、16周目に起きたアクシデントの際にコースインしたセーフティカーとほぼ同時にピットイン。上位陣がピットインのタイミングを逸したことで順位をアップして3位フィニッシュを成し遂げた。このセーフティカー導入の原因となったアクシデントは、ジェームス・ロシターと他車との接触、コースオフによるものだった。ロシターは、そのままリタイアした。



- 中嶋は、ミディアムタイヤ。ロシターは、ソフトタイヤを装着して決勝に臨んだ。
- 中嶋は、スタートポジションをキープしてレースの序盤戦を周回。一旦、8位に順位を落とすも、前の2台が接触して1台が後退したために順位を戻している。
- 16周目に馬の背コーナーでアクシデントが発生。チームは、中嶋をピットインさせミディアムタイヤからソフトタイヤに交換。給油をして再びコースへ送り出した。
- 中嶋は9位でコースに復帰。トップ5がピットインしない状態で6周に渡ってセーフティカーランが続いた。
- 全車がピットインを終えると、上位進出、表彰台の可能性も出てきた。残り10周で4位、62周目で3位に順位をアップ。そのままゴールした。
- ロシターは、16周目にリタイア。決勝周回数75% (51周) = 完走扱いを満たしていないために順位は与えられなかった。

Driver	Car No.	Position/ Best Lap Time
中嶋一貴	36	P3 1:08.525
ジェームス・ロシター	37	リタイア 1:09.300

天候	晴れ/ドライ	
気温/路面温度	気温 24-23度C	路面 41-40度C

中嶋一貴 (36号車ドライバー)

「もちろんできるだけ上位を狙ってスタートしたのですが、表彰台に立てるとは思っていなかったの、嬉しい限りですね。アクシデントでセーフティカーが出るといふ展開もある程度頭に入れて戦略を立てていたの、それがハマって、絶妙なタイミングでピットインできたことで得た3位ですね。しかし、そのアクシデントはチームメイトが関わっていたというのは皮肉ですね。今シーズンは、開幕からパツとませませんでしたから、これで流れが変わってくれることに期待しています」

ジェームス・ロシター (37号車ドライバー)

「スタートから順位をアップしたいと思っていたのに、そのスタートが最悪で、最後尾まで順位を落としてしまった。何とか順位を挽回できて、何度も前車にアプローチしていた。最終的に接触してしまった、前を走行していたマシンは、それまでも馬の背コーナーで何度も接触してきた。こちらがパッシングにかかることは十分に認識してくれていたはずだと思うが、再び寄ってきてハードに接触、2台揃ってコースオフ。それでレースは終わった。この悪い流れを変えたい」

小枝 正樹 (36号車エンジニア)

「決勝日、朝の走行でもあまり調子良くなかったの、一貴選手の意見も盛り込んだセットアップに変更して決勝に臨んでいます。まだ完璧とは言えないまでも、そのセットは良かったようです。そして、われわれにとっては、セーフティカーが入ったタイミングでピットインを実行できたのは最高でした。トップ5がピットインしなかったのは不思議なくらいで、それによって大きく順位アップできました。次戦からもこの調子を維持したいと思います」

東條 力 (37号車エンジニア)

「もう追い上げるしかありませんから、ソフトタイヤを装着して、セットアップも追い上げを重視したものでスタートしてもらいました。しかし、スタートを大失敗してしまったようです。それ以降は、順位アップしていたのですが、接触してしまって終わりとなりました。予選もそうですが、決勝で最後まで走行できないというのは、データを収集することができないので、どんどん負のスパイラルに入ってしまう。この流れを次戦から変えないといけませんね」

館 信秀 (チーム監督)

「一貴の前を走っていたマシンたちはセーフティカーが入った時点で、なぜピットインしなかったのだろう。それによって、われわれは、ものすごく得したわけだ。これもレースだから素直に嬉しく思うことにしたい。しかし、一貴が得したのは、ジェームスのアクシデントによるものだから、チーム全体としては、喜べない面もあるので複雑だ。表彰台に二人のドライバーが立つことを目標に次戦に臨む」



※次戦は、7月7-8日に、静岡県の富士スピードウェイにて、シリーズ第4戦が開催されます。